

2020. 10. 25. 聖霊降臨節第2主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書14章25-35節

『キリストの弟子となる』

イエス・キリストはエルサレムに向かう旅の途上にありました。それは十字架に向かう旅でした。その主イエスに大勢の群衆が一緒についてきました。群衆と呼ばれるほどの数ですから、大変な数の人だったのでしょうか。この人たちはなぜ、キリストについてきたのでしょうか。奇跡に驚き、感動した人や、キリストの話に胸打たれた人もいたでしょう。野次馬的な人もいたでしょう。いろんな人たちがいた。だがその人たちはエルサレムで主が十字架にかかって死ぬことなどこの時、想像もしていなかったでしょう。その群衆に向かって語られた言葉が今日の聖書箇所には記されています。

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、さらに自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」。すさまじい言葉です。キリストの弟子となるためには、両親、連れ合い、子供、兄弟、そして自分さえも憎まないのなら、無理だ、というのですから。

以前の口語訳聖書は「憎む」という言葉を「捨てる」と訳していました。実はこの言葉には、憎むだけでなく、放棄する、捨てる、わきに置く、無視する、といった様々な意味があります。続く27節には「自分の十字架を背負ってついてくる者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」との言葉があるのですが、これは同じルカ福音書の9章で、「わたしについてきたい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と重なる言葉です。

それで、まず、「憎む」と翻訳された言葉、「捨てる」という意味にアクセントを置く言葉として読んでいきたいと思います。

キリストに従い、キリストの弟子となるということの根っこには「捨てる」ということがあるのだ、ということがここでキリストが語ろうとしている

ことです。キリストについていく、ということはキリストに従うことです。従う、服従するということの根本には、自分の思い、考え、それを放棄してキリストについていく、ということがあるのです。従う、という瞬間には必ず手放したり、放棄したりするということが起こるのです。でなければ、従うことにならず、自分に従っているだけ、ということになるのです。

キリスト教信仰というのは、簡単に言えば、イエス・キリストに従うということです。自分に従う生活から、キリストに従う生活に方向転換していくことです。その根本には「捨てる」ということがあるということです。「捨てる」となしには、キリストに従うことはできない、と語られているのです。

群衆はキリストについてきました。ついてきた理由はさまざまでしょう。しかし、キリストがここで言われているのは、わたしに従う、ということは、自分を放棄すること、捨てること、手放すこと、自分を無視することだ、と言われたのです。群衆は頭から冷水、という感じだったのではないのでしょうか。

キリストはこの後、二つの短いたとえを語られます。一つは、塔を建てようとするなら、まず腰を据えて、建てるだけの資金があるかどうか、十分計算するだろう、という話です。そしてもう一つは、王が戦争をするとき、二万の兵で進撃してくる敵を、一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、どんな作戦が可能なのか、まず腰を据えて考えるだろう、という話です。二つの話に共通しているのは、大きなことにぶつかり、判断を迫られるとき、「まず腰を据えて」熟慮する、という点です。よく考える。判断をするために考える。そして一つの判断を下す。

キリストに従うというとき、単に勢いでついていくとか、感動したから、ついていく、というようなことだけでは、とても従っていくことはできない。まず腰を据えて、熟慮する。それは、自分が生涯最後まで従っていけるかどうか、というようなことをあれこれ思案する、ということではありません。それは自分で考えてわかることではない。そうではなくて、自分はキリストの言葉の前で、自分を手放していこうとするのか、それとも自分に固執してしまうのか、よく吟味する必要がある、ということです。そうではなくては、ついていった方がいいが、何かちよつとした困難があれば、離れてしまう。いやなことがあれ

ばついていくのをやめてしまう。自分を手放さない、ということは、ある意味で自分の幸不幸、自分の損得、自分の好悪に拘泥するということですから、いやなこと、嫌いなこと、そんなことが出てくれば、キリストから離れてしまう。

ついていく、ということはキリストに従う中で、自分にとって嫌なことがあっても、ついていくということです。どうしてそういうことが起こるかという、それは、キリストの前では自分をたとえ少しだけであっても手放せる、放棄できるから、という他ない。

キリストは従うという話の中で、だれでも父、母、妻、子供、兄弟、姉妹、さらに自分の命であろうと憎まないなら、わたしの弟子ではありえない、と言われました。両親とか、連れ合いとか、兄弟というのは、わたしたちが生活の中で最も愛している人たち、愛されている人たちです。最も深いつながりの中にある人たちです。だからこそ、この人たちとのつながりのゆえに、キリストに従わないということも起こるのです。家族のつながりこそ最優先されて、キリストとのつながりが後退していくということも普通にある。そこにこそ落とし穴がある。キリストは単純に家族を憎め、というような話をしていてのではない。そうではなく、どんなに人間として豊かな関係であり、深いつながりがあるとしても、それを一旦脇に置いて、キリストに従うということの中で、家族との関係も、連れ合いとの関係も受け取りなおすのです。憎むという言葉が表現しているのは、一旦脇に置いて、ということ、一旦手を放して、腰を据えてキリストを見つめ、キリストに従う中で、家族の関係も受けなおすということです。一旦脇に置いて、というのが、放す、手放す、という意味に込められたものなのです。

最後に塩の話が出てきます。これはわたしたちにはわかりにくい話です。というのも、ここで出てくる塩とは、聖書の時代に、死海沿岸で取れた岩塩のことで、不純物を多く含んだ塩でした。わたしたちが今手にしている塩は長く保存しても塩のままですが、この時代、この地方の塩はそうではなかった。塩の成分が変質して、塩でなくなってしまうものがあつたのです。塩が塩でなくなってしまう、その時塩は塩としての働きをしないものになってしまう。

わたしたちがキリストに従うというとき、要となっているのは、「捨てる」ということです。キリストの言葉の前で自分を捨てる、手放す。それが要。もしそれがなくなってしまうたら、わたしたちはキリスト教の共感者やキリスト

を尊敬するものではあっても、従う者とはならない。つまり塩としての働きはしないのです。

パウロという人は、自分のこれまで経歴や歩み、自分の信仰に自信のある人だったと思います。非の打ちどころのない人だった。自分自身そのことを誇っていました。しかし、イエス・キリストに出会って、彼は大きな変化を自分の中で経験します。それは自分のやってきたこと、自分の信仰で救われるのではない、ということです。救われるのはただキリストの十字架、キリストの復活、キリストの真実によるものであって、自分の経歴や自分の信仰によるのではない、ということを知るのです。パウロはこういっています。「人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、わたしたちもキリストを信じました」。そのときパウロは、自分が握りしめていた自分の経歴、自分の信仰、そして自分の誇りというものを手放したのです。初めて手放した。そして自分の信仰を誇っていた自分をあえて言えば憎んだ。そこでパウロは、キリストに従う生き方を見出し与えられたのです。

キリストに従うことは、「捨てる」ことだという今朝の聖書のみ言葉をそれぞれ自分の歩みの中で聞き取っていきましょう。